The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大英帝国とその周縁への、世紀転換期アングロ・インディアンのまなざし : キプリングを手がかりに
Author(s)	北原, 靖明
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43334
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏　　名	北　原　靖　明（きた はら やす あき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　16503　号
学位授与年月日	平成13年9月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**大英帝国とその周縁への、世紀転換期アングロ・インディアンのまなざし －キプリングを手がかりに－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　川北　稔 （副査） 教　授　杉本　淑彦　　教　授　竹中　亨

論　文　内　容　の　要　旨

ヨーロッパ中心的な歴史観からの脱却をめざしている現在の歴史学では、ヨーロッパ人のアジア観やアジア人のヨーロッパ観の分析が、中心的な課題のひとつになっている。本論文は、従来取り上げられることの少なかった、支配者としてインドに長期間滞在したイギリス人たちのインド観を解明している。400字詰め原稿用紙換算750枚前後、ほかに添付文書約45枚の大作である。従来、イギリス人のインド観について語られるとき、その多くはここでいう「メトロポリタン」、すなわち、本国にいてインドをほとんど知らない人びとか、ほんのつかの間、インドに滞在したにすぎない「グローブ・トロッター」たちのそれが分析されるのがふつうであった。これに対して、本論文は、長くインドに滞在した「アングロ・インディアン」たち――インド生まれの者も少なくはなかった――の視座を明確にするものである。「アングロ・インディアン」の典型であった歴代総督や作家キプリングを中心に、彼らのインドについての言説を分析するに当たって、論文の著者は、本国イギリスにおける功利主義的・保守党的立場と、自由党的な自由貿易・小英国主義的な立場とを区別し、「アングロ・インディアン」のそれが、一般的には前者と親和性を持っていたことを明らかにする。

全体は11章に分けられ、いわゆる大反乱後、インド統治のあり方をめぐって保守党と自由党の二つの見方が本国内で対立したことから説きはじめ、「メトロポリタン」、とくに「グローブ・トロッター」に対する「アングロ・インディアン」の反感が重ねあわせられる。Ⅲ章以下では、インド官僚の本国内および任官後の教育に、彼らのインド観が微妙に反映されていることが示され、さらに「アングロ・インディアン」の独特の感情をはぐくむ場として、高原都市シムラにおける社交生活が描かれる。けっきょく、「アングロ・インディアン」が「メトロポリタン」と著しく乖離していたのは、現地のインド人やインド社会に対する評価と、インドにおけるイギリス支配の安全保障――イギリス軍の実態と対ロシア国境問題――についての認識の違いのためであった。

Ⅶ章以下では、「アングロ・インディアン」の社会にも、インド人の社会にも属さない周縁的な人びとへの視線や、中国・日本・米国などに対する見方のなかに、「アングロ・インディアン」の特殊な感情を読みとる。ついで、キプリングの『キム』と『ジャングル・ブック』をとりあげ、「アングロ・インディアン」としての彼の隠喩を解明する。さらに激変するインド情勢と総督カーゾンの権威主義的な統治、総督ミントによる改革とその背景となった思想などが分析され、最後に、本国に帰国した「アングロ・インディアン」たちの生活と思想が、帝国的な広がりをもつ視野の観点から分析されている。

論文審査の結果の要旨

イギリス人のインド観については、すでに長い研究史がある。しかし、その大半は本論文のいう「メトロポリタン」のインド観を扱っており、「アングロ・インディアン」の立場を持ちだし、これを中心に分析したものはほとんどない。18世紀の「アングロ・インディアン」については、わが国でも「ネイボッブ」の呼称のもとに、いくつかの著作が散見されるが、それもおおむね実態研究に限られており、東インド会社廃止後の時代について、このような研究はほとんど進んでいない。したがって、本論文の最大の意義は、この新しい問題を発掘し、インドには政治改革が必要と考える「メトロポリタン」にたいして、社会改革を第一とみなす「アングロ・インディアン」を措定することで、議論の出発点となるうるイメージを描き出した点にある。また、方法的な特徴としては、キプリングという文学者の作品を十分に史料として活用した点をあげることもできよう。ただ、なお望むべくは、文学者キプリングと実務家たる総督たちの残した史料を、どのように使いわけるかについて、いま一歩厳密な考察があってしかるべきであったといえるかもしれない。

ともあれ、本論文は、「言語論的転回」を試みつつある現代の学界動向に照らして、十分貢献しうる水準にあり、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認める。